

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第70号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)3月16日 金曜日

2018年(平成30年)3月16日 金曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜する。また放置されている縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。



東北大震災7年に思う

今後東北をどうするかを考えなければならない

また3・11がやってきた

あれからちょうど7年が経過した。この季節になると、例年の如く、関連イベントが多数開催され、特集番組が流され、当時の映像がTV画面にあふれる。

また視聴率狙いの番組編成だろうとか、ビジネス狙いだろとか、意地悪く言う人もいるかもしれないが、それでもこれらの番組やイベントを見て、あるいは参加して、さまざまに感じ、あの震災を思い起こすことの意義は大きい。

日常の忙しさにかまけて忘れていたものを国中で一斉に思い起こさせることはやはり重要だ。

あの震災が日本国民の共有体験であることを強く意識させるからである。

筆者は、以前にも書いたが、震災発生から約半年間、帰宅してから丑三つ時までTV画面にくぎ付けになり、大震災の映像と、福島第一原発に絡む映像と解

説を飽きずに毎日見て、記憶に焼きつけておいた。睡眠時間は四時間強の毎日だった。不思議に眠気は感じなかった。

そのため、三月十一日が近づき、あの時の映像が流れると、まざまざと当時のシヨックや怒り、やり切れない思い、名状しがたい感情がすぐさまわき起こってくる。

だから、この時点で、あの時の状況を忘れることはけつしてない。

当時、この未曾有の体験の生き証人の一人になるため、またこの体験を絶対に忘れることのないように記憶にも、身体にも消えることなく刻みつけようと思っ

た。その後、震災直後のどうにも名状しがたい感情が何だったのかは、時が経つにつれ、少しずつ形になって来ているのを感じる。

当時の感情を客観視するためにはそれ相応の時間経過を要するということなのだろう。

この長い時間の経過を振り返ってみると、どうやらこの七年という時間は、大きな節目のように感じる。

震災直後は、とにかく、離れ離れになった家族探しと緊急の生存環境再構築が目前の課題だった。

まず水と食料であり、当座の寝起きする場所の確保であり、着の身着のままだった被災者の衣類確保であり、行方不明の家族探しと犠牲者の弔いであった。

この時は、外部の助けは不可欠だった。

何とか生きのびる環境を確保できるようになれば、

次は、少しずつ元の暮らしに戻す努力が延々と続く。それはこの先も継続する。

そして、いまだに大震災を振り返る余裕などない。

緊急の生存環境再構築以後、今度はプライバシーとだれにも邪魔されない睡眠が確保でき、料理ができる住居の確保、バランスの取れた食事、行方不明の家族探しと犠牲者の弔いは続いていた。

しかし、インフラ等の再構築の遅れ、官僚的なもののろした対応が被災者をいらだたせる。

ずっと我慢に我慢を重ねてきた被災者たちが心の中に抱え込んできた感情が、その遅れへの怒りという形で噴出した側面も多々あったはずだ。

また、震災直後には「絆」だと大騒ぎだった国中の空気が徐々に変わった。

あんなに大騒ぎだったのに、全国からボランティアがあんなに押し寄せてきたのに、短い期間のうちに、祭りの後の静けさのように静かになってしまった。そして被災者も被災地も忘れ去られたという疎外感にも苦しむこととなった。

ふたたび、みな、個々人の強烈な悲愴すぎる体験という孤独なたこぼ状態に逆戻りしていった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

東北大震災7年経過は転換点か

この新聞を毎月休むことなく、足掛け7年継続し、毎月、編集方針を決め、取材し、記事を書いてきたので、否が応でも、この大震災を一月以上意識しないことはなかった。むしろ、いつも大震災とそこから復興プロセスとともに過ごしてきた。

その長い時間の経過を振り返ってみると、どうやらこの七年という時間は、大きな節目のように感じる。

震災直後は、とにかく、離れ離れになった家族探しと緊急の生存環境再構築が目前の課題だった。

まず水と食料であり、当座の寝起きする場所の確保であり、着の身着のままだった被災者の衣類確保であり、行方不明の家族探しと犠牲者の弔いであった。

この時は、外部の助けは不可欠だった。

何とか生きのびる環境を確保できるようになれば、

次は、少しずつ元の暮らしに戻す努力が延々と続く。それはこの先も継続する。

そして、いまだに大震災を振り返る余裕などない。

緊急の生存環境再構築以後、今度はプライバシーとだれにも邪魔されない睡眠が確保でき、料理ができる住居の確保、バランスの取れた食事、行方不明の家族探しと犠牲者の弔いは続いていた。

しかし、インフラ等の再構築の遅れ、官僚的なもののろした対応が被災者をいらだたせる。

ずっと我慢に我慢を重ねてきた被災者たちが心の中に抱え込んできた感情が、その遅れへの怒りという形で噴出した側面も多々あったはずだ。

また、震災直後には「絆」だと大騒ぎだった国中の空気が徐々に変わった。

あんなに大騒ぎだったのに、全国からボランティアがあんなに押し寄せてきたのに、短い期間のうちに、祭りの後の静けさのように静かになってしまった。そして被災者も被災地も忘れ去られたという疎外感にも苦しむこととなった。

ふたたび、みな、個々人の強烈な悲愴すぎる体験という孤独なたこぼ状態に逆戻りしていった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

次は、少しずつ元の暮らしに戻す努力が延々と続く。それはこの先も継続する。

そして、いまだに大震災を振り返る余裕などない。

緊急の生存環境再構築以後、今度はプライバシーとだれにも邪魔されない睡眠が確保でき、料理ができる住居の確保、バランスの取れた食事、行方不明の家族探しと犠牲者の弔いは続いていた。

しかし、インフラ等の再構築の遅れ、官僚的なもののろした対応が被災者をいらだたせる。

ずっと我慢に我慢を重ねてきた被災者たちが心の中に抱え込んできた感情が、その遅れへの怒りという形で噴出した側面も多々あったはずだ。

また、震災直後には「絆」だと大騒ぎだった国中の空気が徐々に変わった。

あんなに大騒ぎだったのに、全国からボランティアがあんなに押し寄せてきたのに、短い期間のうちに、祭りの後の静けさのように静かになってしまった。そして被災者も被災地も忘れ去られたという疎外感にも苦しむこととなった。

ふたたび、みな、個々人の強烈な悲愴すぎる体験という孤独なたこぼ状態に逆戻りしていった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。

大震災から数年間は、個々人の体験のあまりの重さを真正面から受け止めきれず、とても共通の体験へと昇華させる余裕などどこにもなかった。



筆者著：東北独立

とはいえ、一人一人が、あの震災を何とか受け止めるよう必死であった。

被災地復興は遅々と進まず

筆者は、震災から九カ月後の二〇一一年十二月に、『東北独立』という本を出版した。

その中で、どうしても言いたかったことは、当時の枠組みのままではきつと東北の復興はうまくいかないだろうということだった。

また、復興を実現しようと思うならば、東北が独立するほどの勢いがなければならぬということだった。

未曾有の大災害から復興するには、やはり未曾有の大改革と奇想天外とも思えるような計画が必要だが、そうした姿勢はどこにも見られなかったからである。

つまるところ、東北自身が、国の規制を留保して、かつ国に率先する形で、あたかも一つの国のように復興をリードしなければならぬという思いだった。

そして現実には東北が独立する方法を机上ではあるが考え、本に記載した。

当時、日本中で話題となっていた道州制を契機として、それをさらに発展させて、それをさらに発展させて、独立を指向しようという主張も盛り込んだ。

復興がうまくいかないと、東北切り捨て論が出てきたり、産業が空洞化し、被災地が孤立していったりする。被災地のゴーストタウン化も覚悟しなければならぬ。震災に伴う過労死、自殺も増える。

そうした「不幸なシナリオ」も書いてしまったが、現在を概観すると、残念ながら当たってしまったことも多い。

被災者や被災地は、大震災のシヨックに加えて、その後の遅々として進まない復興作業のシヨックや怒りも襲ってくる結果となり、孤独感と孤立感は加速したはずだ。

個々人の体験を越えて体験の共有と昇華

他方、被災者の精神ケアが叫ばれてきたが、震災直後からいままでも、筆者の想像世界の中では、犠牲者と被災者の重なる個別の体験が頭のなかで乱舞するのみだった。

精神ケアという枠組みを大きくはみ出すような、重すぎる体験に傷ついたら心の問題をどうすればよいのかを考えると、まったく無力であった。

直接的な被災者ではない筆者にとっても、その体験の世界にはとても入り込めない。入り込もうとしても、巨大な壁のようなものに弾き返されていた。

すべての体験が生々しく重すぎて、また、ひとつとして同じ体験などないし、そうした状況から、とても概念化しての共通体験化などできるはずはないとずっと思ってきた。

それがここまでの経過ではなかったのだろうか。一方で、「昇華した共通体験」がないと、「対話」は閉ざされたままであり、

ましてや後代に語り継ぐことなど困難である。 どうしても**体験の共有**が必要なのだろうと感じてしまった。

そのため、さしたる確信もなかったが、個々の体験を共有するために、また後代に語り継ぐために、この体験を昇華させて、幽玄の世界を表現する「能」に結実させるのはどうかと考えたのだ。

被災体験からはまったくの外部者だった筆者は、体験を共有したい、語り継ぐための装置が必要だとあせっていたのだらう。

被災者だけでなく、震災関係者からも、この計画は「浮いた」ものだったといまになつては思う。

遠野物語九十九話

当新聞で何度か取り上げたが、遠野物語九十九話の子供と奥さんを津波で亡くした夫が、ある霧の夜に、亡くなった奥さんの亡霊に会って語り合うという話がある。

生き残ったものと、死んでいったものとのあまりにも切ない物語である。

しかし、これは民話ではなく、実話であり、明治二十九年(1896年)の明治三陸地震の津波の犠牲者と生き残った家族の話である。

筆者としては、被災者の方々に、この物語世界に没入していただき、あの大震災で凍ってしまった心を何

とか解きほぐしてもらいたいとの思いから、何とか、この物語を新しい能にすることはできないものかと思いついて、記事にもしたのだ。そして、この新聞を通じて、新才能の作者に呼びかけもした。

さすがに筆者も、今般の大震災からの話を元にして、能に結実させることは考えなかった。それは被災者の方々へのまだ癒えない傷への精神的な暴力でもあると考えたからである。

しかし、遠野物語九十九話は明治三陸地震の話であるし、今般の大震災から引き出した話ではなく、百年以上前の話であるから、被災者の方々の心の解きほぐしのために許されるのではないかと考えた。

しかし、あらためて考えると、この話は百年以上前の話であっても、いまでもまだまだ生々しすぎて、かつ主人公の関係者も生存し、実名が判明しているように、昇華するには時間が不足していると思いついた。

被災者の方々が、まだ別の重い体験の域から脱出できていない被災地では、まだ刺激的すぎる話だと思いついた。

海を恨まない老婆

話題を転じて、大震災直後に撮られた一枚の写真が脳裏に焼きついている。しかしどこを探しても見つからない。ネットから消されてしまったのだろうか。

被災した老婆が、嘆き悲しむ顔もせず、悲しみの極を越えて、堂々と大災害を受け止め、津波で汚泥が散乱している道を歩いている姿の写真であった。

大津波で家族も失ったであろうその老婆は、津波を引き起こした海を恨むでもなく、静かに状況を受け入れているように見えた。

その姿が、何か生身の人間を超越して、「神々しい」とでも表現できるような雰囲気を感じていたので忘れ

ることができない。 まことに悲しすぎる出来事ではあったが、大自然の驚異でもあるこの大震災を、大いなる自然の営みのひとつとして受容しているように見えた。

日本列島に人が住みついて数万年以来、何度となく経験してきた自然の大災害ではあるが、これを超越的な神のなせる業(わざ)として受け入れているようにも見えた。

わずかに八十年ほどの寿命の人間ではあるが、この老婆は、何世代も、何十世代も、何百世代も生き抜いて、再びこの大災害に遭遇したというような印象さえ抱かせる姿であった。

直観的に、この老婆にこの大震災を語らせるといことを思いついた。

しかし、生身の老婆ではない。老婆の姿をした、この大自然の魂の化身とでもいうような存在として、この大震災を語るのである。

個人主義が浸透した現代の日本にはめつたに見ることができない存在として、あるいは神話世界の住人として、この震災をどう語ってくれるだろうか。

そのことが、七年を経過した今ならば可能ではないか。 そうしたことをつらつら考えるこの頃であった。

復曲能『名取ノ老女』

今回号の記事執筆にあたって、いろいろ検索していたら、**復曲能『名取ノ老女』**という能が二年前に上演されたことを知った。

新才能の創作と呼び掛けられた筆者にとつて、この公演を知らず、見逃したのは大失策であった。



国立能楽堂特別企画公演 復興と文化 特別編 老女の祈り 復曲能『名取ノ老女』(なとりのおらじよ)

平成29年 3月25日(金)・26日(土)

東日本大震災から5年を迎える平成29年3月、国立能楽堂は「復興と文化 特別編 老女の祈り」として東北・名取(なとり)を舞台にした復曲能『名取ノ老女(なとりのおらじよ)』を上演しました。『名取ノ老女』(劇名『難波(なみ)』『名取(なとり)』)は能楽史上名高い寛正5年(1464)の『乱河原(らんがわら)』(作者不明)と並び、以後の上演は絶えず、平成5年には東北六郡(現宮城)長谷(長谷)として仮装舞臺を中心にこの能を復活させ、成果をあげました。

この度の復曲能『名取ノ老女』では、この作品を改めて検討、劇作を加えつつ、能の定まりきった老女と難波(なみ)の登場人物(おらじよ)をシテ方(シテ)が、山伏(さんぶつ)をウキ方(ウキ)が演じる形で復興し、新たなレパートリーの創出に努めます。特に中盤は難波・宮城・全館のシテ方三氏の参加が実現、豪華にして最新の設備も大きな話題です。ひたすら祈りに専らする老女の姿、そしてその祈りが届くという奇蹟は、震災を経験した私達にとって宗教的救済とは何か、『祈り』とは何かを問いかけます。震災を渡した老女による『名取ノ老女』と『祈り』の物語、そして神楽舞と神の出舞など、新たな魅力をまとった本作にご期待ください。



写真：能楽堂

同時上演は『祈り』のテーマの下、能の先行品として美しい、東北・平泉に伝わる「延喜寺の延年(もうつうじ)のえんねん」です。延年の中でも『老女』は、舞台の老女がこれまでの人生への感謝と将来の平安を祈りに出でて舞われるとき、色紙の上演演出となるでしょう。

『名取ノ老女』ものがたり
東日本大震災から5年を迎える平成29年3月、国立能楽堂は「復興と文化 特別編 老女の祈り」として東北・名取(なとり)を舞台にした復曲能『名取ノ老女(なとりのおらじよ)』を上演しました。『名取ノ老女』(劇名『難波(なみ)』『名取(なとり)』)は能楽史上名高い寛正5年(1464)の『乱河原(らんがわら)』(作者不明)と並び、以後の上演は絶えず、平成5年には東北六郡(現宮城)長谷(長谷)として仮装舞臺を中心にこの能を復活させ、成果をあげました。この度の復曲能『名取ノ老女』では、この作品を改めて検討、劇作を加えつつ、能の定まりきった老女と難波(なみ)の登場人物(おらじよ)をシテ方(シテ)が、山伏(さんぶつ)をウキ方(ウキ)が演じる形で復興し、新たなレパートリーの創出に努めます。特に中盤は難波・宮城・全館のシテ方三氏の参加が実現、豪華にして最新の設備も大きな話題です。ひたすら祈りに専らする老女の姿、そしてその祈りが届くという奇蹟は、震災を経験した私達にとって宗教的救済とは何か、『祈り』とは何かを問いかけます。震災を渡した老女による『名取ノ老女』と『祈り』の物語、そして神楽舞と神の出舞など、新たな魅力をまとった本作にご期待ください。

国立能楽堂特別企画公演案内より



東北地酒ラインアップ

次回の
三陸酒海鮮会
(第32回)

2018.3.24(土)
16:00 ~ 19:00
於: 渋谷焚火家



第43回
水産業再興のための料理レシピ紹介
たらの季節に《鱧の三平汁》



鱧



完成品



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 鱧 400 g、じゃがいも 400 g、大根 80 g、人参 60 g、ネギ 80 g、塩 適量、ほんだし 適量

【作り方】

① 鱧はぶつ切りにして塩をしておきます。② じゃがいもは皮をむき乱切り、大根、人参はいちょう切り、ネギはななめに切ります。③ 鍋に昆布出しをいれます。塩した鱧を湯通しします。④ 先にじゃがいもを入れて、大根、人参を加えます。野菜に火が7割通ったら、鱧を入れます。じっくり煮て、ほんだしを入れます。⑤ 塩加減をみて、最後にネギを放したら、出来上がりです。



写真でお伝えする
東北の風景
(春遠からじ)

写真撮影:尾崎匠



震災から7年の 仙台・荒浜



が、手元の時計を見て海に向かつて手を合わせた。他の人も皆、同じように手を合わせていた。

小学校のみであった。小学校の児童、地域住民ら約320名がここに避難して難を逃れたが、一方で192名が津波に飲まれて亡くなった。仙台市の沿岸はどのもこの荒浜地区のように高台が存在しない。そこで仙台市では津波避難施設を沿岸に13カ所整備した。いざという時にはそこに避難することができるようになった。この荒浜小学校も、津波避難施設を兼ねている。

方が重要である。午後3時54分は、この地区に大津波が押し寄せた時刻である。この時刻については、弟と同様にこの地区で避難呼び掛けをしていた若林消防署荒浜航空分署の署員の方の証言で明らかになっている。この時刻に合わせて、南長沼に行ってみる。この地区の方々の遺体の大部分は、自衛隊や消防、警察による懸命の捜索の結果、ここで見つかった。決して、300人もの遺体が震災当日に海岸で見つかったというような状況ではなかったのである。

人口100万人を抱える大都市がこれだけの大津波に襲われた事例は、世界的に見ても稀だと思われる。この未曾有の災害から得た知見を発信することは、日本のみならず世界の都市防災にとっても大いに有意義なことである。その意味では、「せんだい3.11メモリアル交流館」や荒浜小学校を多くの人が訪れていることは、そうした情報発信がある程度うまくいっている一例と言えるのではないだろうか。9日には3回目となる「仙台防災未来フォーラム」も開催された。

今年も3月11日がやってきた。震災発生から7年。今年も新聞各紙が一面で伝え、NHK、民放各社とも特別番組を企画するなど、忘れずに取り上げてくれるのはありがたいことである。仙台の街中に行くと、震災の爪跡を見つけることはもうほとんどないが、それでもやはりこの日だけは毎年、普段とは違った心持ちになる。

今年も出発点は若林区役所である。今日は日曜日ということで閉庁日だったが、献花台は今年も設けられ、人がひっきりなしにやってきていた。ここで

うして手を合わせている人、一人ひとりにきつと失われた大切な命があったのだと思うと、改めてこの震災の大きさに思い至る。若林区役所を出て一路東に向かい、沿岸の荒浜を目指す。震災直後、「海岸で200〜300人の遺体が見つかる」などとショッキングに報じられた地区である。あの報道は実は誤報だったが、かなり後まで繰り返され続けた。

あの日、津波からの避難を地区住民に呼び掛けるべく、弟が公用車に乗って辿ったであろう道を走る。今日は南東の風が強く、自

転車がなかなか前に進まない。冬の時期、いつもは北西の強くて冷たい風が吹く。南東の風は春の風のはずだが、全く暖かさは感じない。冬の冷たさのままの風である。

荒浜に行く途中、仙台市地下鉄東西線の東の終点荒井駅に寄り道する。ここには2年前の2月、「せんだい3.11メモリアル交流館」が開設された。交流スペース、展示室などからなる施設で、震災やこの地域に関する各種情報を発信していくことを目的につくら

れた。昨年6月には来場者が10万人に達したとのことである。

荒浜に向かう道は今年も渋滞していた。荒浜地区一帯は震災後、災害危険区域となり、人が住むことのできない地域となった。他の地域への移住を余儀なくされた元住民の人たちがこの日は皆、ここに集まってくる。今年も地区唯一の寺院、浄土寺ではこの地区で亡く

なつた人のための追悼法要が営まれた。また、海岸近くに立つ「荒浜慈聖観音」には今年も焼香所が設けられ、たくさんの方が焼香していた。

防波堤に登って海を見下ろす人、海岸に下りて海を見る人もたくさんいた。今日は風が強く、消波ブロックに打ち付ける波はいつもより高かった。しかし、あの日ここに押し寄せた大津波はこのようなものではなかった。震災前よりも高さが

が増した7.2mの高さの防波堤すら超える、平野部を襲った津波としては世界最大級という、およそ10mの高さの津波。上空から撮影された映像はあるが、地上にいてあの日、その大津波がどのように見えたのか、ここでこうして海を見ている想像することすら

難しい。

そして、午後2時46分。震災発生の時刻である。サイレンが鳴ったり、放送があつたりしたわけではない

仙台平野の一部で延々と平地が広がるこの地域には、津波発生時に避難できる高台が存在しない。あの日大津波に遭遇した住民が避難できる場所はこの荒浜

今年も荒浜小学校では、荒浜を拠点に「繋がりが見えなくなった街に、もう一度笑顔や思いを共有するプロジェクト」である「HOPE FOR PROJECT」が、花の種を入れた風船を空に飛ばすイベントを行っていた。震災から7年経って、このイベントもすっかり3月11日の荒浜の風物詩として定着した感がある。

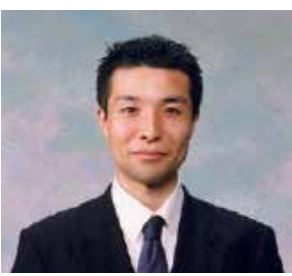
私にとっては、午後2時46分よりも午後3時54分の

だいが埋め立てられて以前より小さくなってしまったが、それでもまだ水鳥が羽を休めるくらいのスペースはある。沼越しに望む海岸沿い、防風林として植えられていた松は、いまだ櫛の歯が欠けたような状態のままである。様々な団体が植林を続けているが、再生にはまだまだ時間が必要で

ある。

大友浩平 (おおともこうへい) 奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が好き。趣味は自転車と歌と旅。 「東北ブログ」 <http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>

Face book <https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>



今年も地区唯一の寺院、浄土寺ではこの地区で亡く



飢えに恵まれた? 東北の事

仙台在住十年は、長いだろうか、短いだろうか。

少なくとも、東京に十五年住んでいた私にとってもかなり東北人に戻れたかなと思う瞬間は多くなったがそれは東北に纏わる問題や出来事を自分なりに肌で感じてきたからかも知れない。仙台的友人達が、この街について語るのもよく聞く。残すべきものを残そうとしない、新しくできたものは浅はかなものばかり、といったお馴染みの批判から近年の仙台は中学校でのいじめや学力の低下、また関西電力による石炭火力発電の強行などもあって、街の未来を真剣に危ぶむ声と溜息を聞く事も、しばしばだ。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

『東北という劇空間』(二〇〇四年 創風社)を著した村上善男もまた、十五年住んだ六十年代から七十年代の仙台について評している。その頃の仙台を象徴する記号だとする戦後からの「屋台」が、初期の四百台余りから数台に減っていく。「モダン都市仙台の誕生は目前であった」時代の事だ。

「この町は創造の意志にやや欠ける所があるのでは」とし、「あらゆる文化の、鑑賞の現場に恵まれている一方で、地域特有の、独自の文化が育っているとは判断しがたい」と、昔から基本的に変わっていない問題を点と線をつなげる一方で、「町の深部にこの都市ならではの、親密な庶民感覚とでもいっていいべきものが満ちていて、懐の深さが感得される。それが魅力だった」と、これもまた二〇一〇年代の私もまだ感じる事のできる、この町の変わりぬ良さと知る事ができるのである。

本書は、せんだいメデアテークの市民図書館で出会った本の中でも印象深いもので、おそらく今や地方図書館や古書店で見かけられない絶版でもあるが故に、個人的には是非文庫化してあらためて広く東北の人に知って欲しい一冊である。村上善男は一九三三年に盛岡市に生まれ、仙台、弘前、そして郷土盛岡へと、東北の都市を移り住みながら大学の美術教授を務め、同時に注射針や釘を題材に用いるなどの、前衛芸術作品を生み出し続けた。

そして二〇〇六年、つまりこの本が出版されて僅か二年後に、心不全で亡くなっている。本書は今純三、萬鉄五郎、橋本花など青森・東北に生きた芸術家について語る事で風土と芸術の密着性を示すとともに、自らの人生や思想を滲ませた一人の東北人の記録である。

また本書には言及されていないが、宮澤賢治による命名で知られる盛岡の工芸品店『光源社』の創業者・及川四郎に「あなたは美術館で美味しい珈琲を飲んだ事があるか」と問いかけて、美術工芸と喫茶の同居という当時は珍しかった営業形態を生むきっかけを作った(出典「てくり」別冊『光源社 北の美意識』より)など、陰ながら現在の東北に様々な影響を残していった人物でもあるのだ。

村上善男について私が忘れられないエピソードの一つに、稀代の芸術家であり思想家でもあった岡本太郎との親交がある。現在の東京・青山にあった岡本のアトリエにて村上が

「そろそろ自分も東京に出てきて、アルバイトしながらでも絵を描きたい。」と明かすと、岡本は一喝しこう言い放ったという。

「お前はそこ(東北)で闘え!」
つまり東京へは出てくるな、辛くても空しくても、東北で活動を続けろと諭されたのである。一見すると大都会の恩恵を受ける芸術家が勝手な事を言う、と勘ぐり兼ねない。当時はもちろん、現在のようないんターネットによる情報網も物販の利便性もなく、東北での活動には今とは比較にならないほど不便が多かった。村上も不思議に思いながら結局その忠告に従う形になったが、岡本太郎のその後の縄文土器への注目、独自の縄文文化への解釈と傾倒、その視線が特にその残照の窺える東北に注がれた事から、ようやくその意味を理解していったという。

この事は私に、アイルランドの二人の文学者に纏わる話を思い出させた。ジョン・ミリントン・シングはパリ旅行中に同郷の作家W・B・イェイツに出会い、こう諭される。

「本当に作家になりたければ、こんな所にいないで祖国、それも祖国の原点たるアラン島に行きたまえ。」
もう一人、リアム・オハラハティはまさにそのアラン諸島はインシムア島の出身。ロンドンにて筆を身を立てようと、社交界を舞台にした小説を手に出版社を訪ねるが、多くの文学者を見出した事で知られるその編集者は言った。

「君がアラン島の出身ならば島に帰り、島の事を書きたまえ。」
もちろん、どこの島や「辺境」の出身であろうが大都会で成功する者は少なくないはずである。いくら都会人に手前勝手な忠告を受けたところで、意地でも帰らないという若者も多いだろう。編集人や先達の直感か、あるいは威光を纏っただけの思いの発言に、深層心理のどこかを刺激される感受性を持った者だけが、時には何も無いと思われた荒野から泉が湧き出すが如き奇跡的な結果を導き出すのかも知れない。

村上善男が地方の、殊更に北東北で活動する事への信念を示す、対談での一連の発言があるので、本書から抜粋してみたい。

「芸術家が誕生するのに一番良い環境はまず第一に貧困ですよ。恵まれた環境に生を受けた、という不幸。(中略)精神の飢えが無いというのは芸術家にとって非常に不幸な事なんです」

「この岩手町に石を彫るために作家が移ってきている。何一つ、ここは良い環境じゃないですよ、寒いですし。作品が売れる保証も無い。だけど、そこにわざわざ来たんです。自ら求めた飢えだと思いませんか。」

「極端に言うならば、仙台ですら情報やモノで溢れすぎていて、芸術や創作の環境としては恵まれすぎ、飢えが足りない「不十分」な場所である。逆説的というか、へそ曲がりな印象すら覚えるが、実際に東北在住の作家や研究者が「この町には雑音(誘惑)が少ないので、仕事に集中できる」と語っているの、一面の真実を言い当てている事は間違いないささうである。

吉幾三の歌ではないが、「〇〇も無え、△△も無え」とかつて国内でも極端に開発や流通が遅れていた、何も無いところの代名詞のようになられていた東北。実際には、時代によって「あるもの、ないもの」の内容はかなり異なっていたように思われる。以前にも少し書いたが、昭和初期から中期(一九三〇～六〇年代)には確かに東京とのアークセスも悪く、中央から流れてくる「先進的」なモノは少なかつたが、地元文化は濃厚に残り、人も多く活気があつた(筆者は生まれていない。親世代の話であるが)。しかし八十年代を過ぎると東京との行き来は容易になって中央発のモノは増えた一方、多くの地域では地元の文化も、そして人も、活気も消えていったのである。

ちなみに岡本太郎が確かに誰よりも先駆けて見えた、縄文という価値観のみが持つ豊かさを、東北の土で育った芸術家にこそ譲りたいと考えた事は想像に難くない。『何でもない』事の魅力として全国から人・モノ・

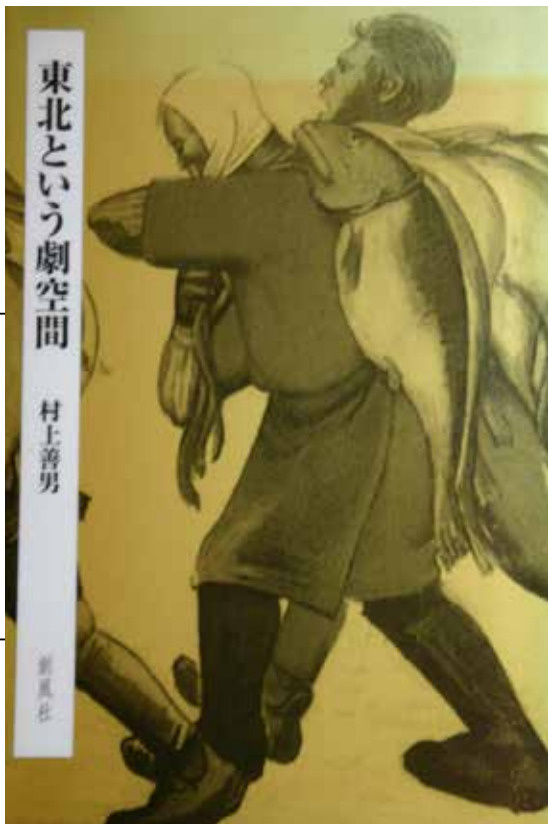
金を引き寄せてきた東京も、今や閉塞感が漂いそこから新しいものがなかなか生まれてこなくなつた、という活動の観点からは)貧困と飢えしかないも充分理解していただろう。実際のこところ、縄文の豊かさなどという見えにくいもの以前に、貧しさと飢えという、東京ではもはや手に入らない要素をこそ、岡本は重視していたのかも知れない。

「何も無い」状態だからこそ、そこから新しいものが生まれ、成長していった事例は明治維新後の日本、そして第二次大戦後の日本の至る所に見る事ができただろう。しかし八十年代、九十年代を過ぎ経済成長期を終えた日本には各分野インフラの老朽化、往年の大企業の構造的問題の表面化など、驕りが顕著に見え始め、撤退戦とか、下山の思想とかいう言葉が頻りに聞かれるようになった。

「何でもない」事を魅力として全国から人・モノ・

でもこの町は、今以上に東北から東京へ人々が流れていかぬ為にも、東京並みにモノのある都市になる事を使命とするかのように発展していく様子を誇示するのだ。私がここを住み続けるに足ると考える、仙台の価値とは何だろうか。今のところ、それはただ他所にない理想的な気候かも知れないし、郷土・山形に食文化が通じているところかも知れない。発展するのは嬉しいが、決して東京並みになる事を望んでいる訳ではない。世界の誰に見せても恥ずかしくない、東北にしか実現できない都市、中心城市であつてほしいと切に願う。そして背後に広がる東北に、これからも芸術家が求める「飢え」があり、それが望まれるというのなら、仙台は彼らの出発点になればいい。その彼らが時に振り返り、豊かさとは何だったかを思索する、オアシスになればいいと思っている。

仙台は長い年月に渡って、東京を意識し、これに追いつこうとしてきた。しかし東京にあるモノを最上の価値とすれば、追いつけないのは自明の理である。それ



東北という劇空間 村上善男

全ての東北人がその舞台に立つ 『東北という劇空間』



SL 銀河



雪まくり現象



臨時列車 風っこ 復路



田中のお社



白鳥とその足跡



SL 銀河



閉じ込められた枯れ葉



山中のお社

シリーズ 遠野の自然 「遠野の啓蟄」 遠野 1000 景より

暦では啓蟄(けいちつ)であるが、とてもそんな気温ではない。虫たちもいま穴から這い出してきたら風邪をひくような寒さが残っている。
遠野もまだまだ寒いですが、急に暖くなる時があるようだ。それを繰り返すうち

にいつのまにか季節が変わっていきのた。
そうした、寒さのなかに春が近づいている気配を感じるこの季節である。
*
SL 銀河の夜の演出は幻想

的である。いまにも空に向かって進んでいくような気がする。
臨時列車は確実に春を運んでくるようだ。
一方で、まだまだ雪も残る。つららも太い。

雪に埋もれたお社の周囲では少しづつ雪が溶けだしている。
雪の上を歩く白鳥であるが、じきに春の訪れとともに飛び立って行く季節でもある。

連載企画③【“東北先史時代学”】 「東北の自然災害概観」 (火山噴火)

東北の自然災害の歴史調査は急務

当新聞は、東北大震災を契機とした津波対策を考えるとき、はるか昔の東北の自然災害を丹念に調べることがを強力に主張したい。また地震と津波に限定せず、範囲を他の自然災害にも拡大して調べることも含んでいる。

なぜなら、地震と津波対策は、他の自然災害にも有効なのかを十分に検証したうえで行われなければならないと考えるからである。調査の時間範囲にしても、ここ数百年などという近視眼的なものではなく、数千年、いやもっと拡大して、数万年というところまで拡大すべきと考える。



鬼界カルデラ噴火時の火山灰分布

自然災害のサイクルは人間の寿命とは比較にならないほど長い。

上記を総合すると、南海トラフ地震と津波ばかり取り上げて大騒ぎし、対策を先行させ、他の巨大災害の可能性を排除するというような愚挙で国民を扇動してはならないと考える。

現に、地震学会では東北大震災地震発生の可能性はゼロだったが、実際に起きてしまったことを十二分に反省してもらいたい。

貞観地震と津波だけではない

幸い、東北大震災を契機として、東北の過去の地震と津波の研究がようやく日の目をみるようになった。そこで登場したのが、いまから千年以上前の貞観地震と津波である。

貞観地震は、平安時代前期の貞観11年(869年)に、陸奥国東方沖(日本海溝付近)の海底を震源域と

して発生したと推定されている巨大地震である。

地震の規模は少なくともマグニチュード8.3以上であったとされる。地震に伴って発生した津波による被害も甚大であった。

この地域に周期的に発生する三陸沖地震の1つとして理解されてきたため、貞観三陸地震と呼称されることがあり、東北大震災がこの地震の再来ではないかとも言われている。

様々な巨大自然災害

日本の巨大自然災害をざっと調べてみるだけで、実にその種類は多く、自然災害だらけの国であることが理解できる。

地震や津波はもちろん、台風、それに伴う大水害、気候の大変化、それに伴う冷害、飢饉、火山の噴火な

ど、数え上げられないくらいである。先人たちは、それらの災害をひとつひとつ克服しようとしてきたが、完全に克服するどころか、まだ始まったばかりといえるのではない。

世界の活火山と地震が集中している国が日本

こうした自然災害だらけの国が日本であり、そこに暮らすことの意味をもっと噛みしめるべきである。

地球規模で考えると、世界に占める日本の国土面積は、0.25%であるにもかかわらず、マグニチュード6以上の地震回数は22.9%、活火山数は7.1%にもものぼる地震・火山大国である。

こうした国は世界にはほかにない。日本列島を中心に、太平洋プレート、フィリピン海プレート、ユーラシアプレート、北米プレートという四つのプレートがせめぎあう場所が日本ということももって認識すべきである。

火山噴火

今回は、数ある自然災害のなかでも火山の歴史を概観してみよう。まず、現代に最も近い巨大カルデラ噴火を見てみる。それは鹿児島沖にある鬼界カルデラであり、いまから七千三百年前に大噴火を起こした。

その大噴火で、九州縄文はほぼ壊滅した。東北にも火山灰が数センチメートル降ったというデータがある。御嶽山の噴火はまだ記憶に新しいが、カルデラ噴火の規模は、そうした単独火山の噴火の規模に比べると一千万倍も大きいという。仮に阿蘇山カルデラから火砕流が流れたら、その火砕流は時速九百キロというスピードで周囲に流れ出る。北九州までわずか十分で到達する。逃げようがない。

もよくよく考えてみる必要があると思う。災害ももたらすが、自然の恵りももたらす自然あふれる国が日本なのである。

高い防潮堤の意味すること

東北大震災の津波対策で、高すぎる防潮堤が話題となっている。

しかし、筆者はこれでも低いと考えている。津波の規模を限定しすぎていると思っている。

なぜ、わずか七メートルや十メートルの防潮堤であるらゆる津波を防げると考えるのか不思議でならない。

また、この防潮堤は、海の変化を察知することを遅らせるリスクもある。

第一、津波にはある程度有効かもしれないが、他の災害にも有効かどうか検証されていないのではないかと。たとえば、大水害にはかえって有害だったりする可能性はないのか。水はけは悪いし、かえって水が溜まるのではないかと。

また、他にも留意すべきポイントがいくつかある。ひとつ目は、津波対策しか見ていないところで対策が検討されていること。高さの決定はどのようになされたのか十分に検証されてはいないと推察されること。津波に限定して考えても、



十和田カルデラ湖



磐梯山カルデラ

自然の力を甘く見くびりすぎていること。今後、東北大震災以上の津波が来ないと誰が断言できるのだろうか。

自然の克服は幻想

近年の日本は、この国が自然災害の国であることをすっかり忘れてしまったように感じる。

歴史を振り返れば、自然の驚異を畏れ、敬い、鎮めるために祈るといったことが頻繁に行われてきた。それがすっかり忘れ去られている。自然を克服したような錯覚に陥っているのではないかと。

そうしたところに東北大震災が発生したので、ショックも余計大きかったとも

言えるのではないかと。日本の自然運行の観測が始まってから、わずかに百年余り。ここ百年程のわずかなデータで、自然を検証したというのは、まったく意味をなさないとと思う。

最近、地震学会自らが公表したことであまり話題にならなかった重要な事実があることを指摘しておきたい。

すなわち、地震発生予測は現在の科学では無理ということである。このことは以前から、一部の地震学者も率直に認めていたが、ようやく学会全体が認めた。これで、地震対策も変化するのが当然だと考えるがいかがだろうか。